



明化の教育

12月号(第473号)
令和元年11月29日
文京区立明化小学校
校長 溝畑 直樹

演劇という活動の効果

校長 溝畑 直樹

昨年度の『日本PTA全国協議会会長賞(団体)受賞』に引き続き、今年度もまた、年末に嬉しいニュースをお届けできます。本校の学校支援地域本部が『学校教育活動支援部門』で東京都教育委員会から感謝状を贈呈されました。去る11月2日には表彰式が執り行われたところです。

学校支援地域本部には、保護者会時の児童の預かり、家庭科など実習活動の授業支援、校内美化活動、机・イスの消音用テニスボール準備、器楽部の活動支援等、多岐にわたる活動で学校を強力にバックアップしていただいています。それぞれお仕事のある中、時には土曜・日曜の時間も使っていただき、子供たちのため、教職員のためにお力添えをいただいている明化小学校支援地域本部の活動が、このような栄えある受賞となって実を結ぶことは、ほんとうに嬉しいことです。支援本部の活動にご尽力いただいた多くの方々みなさまに対し、改めて感謝と敬意を表します。本当におめでとうございました。

さて、11月15・16日の二日間にわたって行われた学芸会『明化座』には、多くの方々のご観覧をいただきありがとうございました。3年間でたった2日しか公演がない特別な劇場『明化座』。上演した6本の芝居はいかがでしたでしょうか。近年、学芸会を『学習発表会』として実施する学校が増えています。学習発表会は普段の学習の成果を様々な表現方法を用いて発表するため、一人一人の子供の特徴を生かしやすいという長所があります。それに対し学芸会は演劇的手法を用いた表現が中心です。本校では今年も学習発表会ではなく学芸会を選びました。それは、ただ伝統に囚われているというだけでなく、むしろ演劇という活動の優れた特質に理由があるといえましょう。



6年生のステージ

近年の研究では、「演劇に取り組むことで人は他者とコミュニケーションをとることが好きになる」との報告があります。より良いコミュニケーションのためには「技術」が大切と思われるかもしれませんが、もっと重要な要素は「いかにコミュニケーションをとることが好きになるか」なのだそうです。現実の世界では、「こんなこと言って大丈夫かな、嫌われないかな…」と消極的になっている子ども、演劇の世界では別です。演劇はウソの世界。現実とは切り離して自己を開放することができます。「人間っていやだねえ。てめえのことばっかし考えちゃって!(5年生の台詞より)」と言おうが、「自分たちと違う人はやっぱりちょっと緊張しちゃう。自分と何が違うのかよくわからないから。(6年生の台詞より)」と言おうが、それは自分じゃなく、演じる役が言っていること。堂々と口にすることができます。しかしここで興味深いのは、演劇そのものはウソの世界であっても、自分の感情を出したり、相手の感情を受け入れたりした経験自体はコミュニケーションの成功体験として、心にきちんと積み重ねられていくことです。成功体験を積み重ねれば、誰かと会話し分かり合うことの喜びを自然に理解し、コミュニケーションに対する苦手意識は払拭され、相手に物怖じすることなく堂々と、コミュニケーションを楽しむことができるようになる。演劇という活動には、このような効果もあるようなのです。

早いもので、東日本大震災から9度目の冬が被災地に訪れようとしています。今年は、震災被災地の中にも台風被害に見舞われた地域がありました。また、河川の氾濫や暴風による住宅被害、農作物の被害など全国各地で災害が多く起こった年でもありました。

被災された皆さまに心からお見舞いを申し上げますとともに、令和2年は、被災地の町にも幸せがたくさんある一年でありますようにと心から祈ります。

峯和田智子教諭は、出産のため11月29日からお休みに入ります。元気な赤ちゃんをみんなが待っています。臨時的任用教員として宮田恵理子(みやた えりこ)教諭が着任し、2年2組の学級担任をいたします。